

野の花を 描く

＊

清水 敦

この数年、私は野の花をモチーフに銅版画の仕事をしている。一輪とか一本とか、図柄はいたって単純で、種類はといえば近くの道端に咲いているたんぽぽやペンペン草といったごくありふれたものたちである。個展の折など「どうしてそのようなものばかり描くのか?」とよく聞かれる。「バラの花とか裸の女とか、もつとばあつとしたものを描いてはどうか」と忠告してくれる知人がいる。ばあつとしていないのはモチーフのせいではなく、私のせいなのだ。――また現代美術、例えばコンセプチュアート(概念芸術)やインスタレーション(架設)について難しい説明をしてくれる友人もいる。そしてお前の若い頃の

抽象画はよかつたよなどと言ってくれたりする。そんな時私は「自分の足もとを見つめていたら、コーラの空缶と一緒に目にとまったものだから」と口ごもりながらつぶやく。

中国や日本には古くから花鳥画(花木鳥獸画)の歴史がある。それはかつて山水画や人物画と並んで重要な美術のジャンルであった。中国では花を地上の美の、鳥を天界の美の理想(象徴)としてとらえ、その大画面は好んで王侯貴族の身辺に飾られたという。我が国に於ても平安の昔、宮廷の貴人たちは障子や屏風に画かれた四季絵や月次絵(一カ月ごとに一年を画く)の中に季節の移り変りを如実に示す花や鳥を見て、和歌を詠んだと伝えられている。そうした典雅な情景は想像するしかないが、当時の仕事を今振り返ってみると、古い中国の花鳥画に強い生命の躍動を、また日本の花鳥画の中に叙情的で繊細な装飾性を感じとるこ

とができる。絢爛とした花鳥画の歴史は幾時代を経て美意識も様式も変遷したが、その底に変わらず流れていたものがあつた。それは自然と人間との深い親和の關係である。

「古池や蛙飛びこむ水の音」という有名な芭蕉の句がある。水分の多い、いかにも日本的な風景を私は心に描く。ところで無粋にもこの森閑とした風景の中に突如、人工衛星がキーンと飛び込んだらどうなるだろう。不謹慎、冒瀆と怒られそうだが、ともかくこの風景は壊れてしまふだろう。パロディやSF愛好者は別として、普通の私たちは耐えられない違和感を感じるに違いない。一体この違和感は何なんだろう。

自然と人間の緊密な關係の中に科学技術という新しい項が加わって人間の意識は大きくバランスを崩した。新しい事態に目をつぶるもの、後ろに向かつて歩き出すものもいたが、歴史の流れはそれを丸ごと飲み込んだ。で、その後の症状は? 美術の世界に限ってみれば、キュービズム(立体派)、ダダイズム(既成破壊)、シュールリアリズム(超現実派)、アブストラクト(抽象)、そして今日の様々なモダニズムとして表われた。人間は新しいバランスを得たのだろうか。答えはまだ出ていない。ただはつきりしていることは、皆でんで自由に個性を、価値の多様化を叫んでいることだ。

今、街で一番静かなところはどこかご存知だろうか。それは現代美術の画廊である。「一体これなあに」「さっぱりわかんない」とか「ようやるよ」といった声がかかれたのは昔のこ

とである。身内や評論家は別として、案内状をもらつても出かける人は少ない。自分の言葉がひとに通じないのは残念なことと思うのだが――。「芸術は時代に先行する」「偉大な芸術は理解されない」と、作者は至つて平気である。確かにそんな気もするが、問題は別のところにあるように思われる。

人間が自然に対応していた時、人間同士には暗黙の共通項があつた(まだ完全な過去形ではない)。遠いアフリカや古代エジプトの彫刻や壁画が私たちに理解できるのもそのせいである。人間が科学的人工物に囲まればはじめると、この共通項は次第にうすれて、人の心はばらばらになりはじめた。最近の子供の中にはカブト虫が死ぬと「カブト虫がこわれた」といい、野原で水仙の匂いをかいで「トイレの匂いだ」といったりする子がいるそうだ。異星人の出現などと驚いてばかりはいられない。自然は繰り返さないが、人工物は繰り返す。自然という依りどころを失つた人間が単調な人工物の繰り返しに耐えるには刺激を必要とする。刺激はより大きな刺激を必要とし、不毛と荒廃へと向かう。私のオーバーな思い過ぎでしょうか?

まずは冷静になつて、私は今一度、自然の前に敬虔になろう。歴史が後戻りできないものであれば、様々な物質から金を作ろうとした中世の錬金術師のように、自然と人間と科学物質を坩堝に入れて新物質、新しい凡神論を作らねばならない。私は今、野の花にその術をたずねているのである。

(銅版画家)

＊野の花を描く

銅版画

清水

敦

清水 敦「野の花を描く」
清水晶子「植物画への誘い」
を参照



▲野の花



▲アザミ



マツヨイグサ▶